

日本の里地里山30保全活動コンテスト

石川の「中田区」が受賞

地域の人々の暮らしと深いつながりを持つ里地や里山の保全、環境維持に尽力している団体を顕彰する「日本の里地里山30 保全活動コンテスト」(読売新聞社主催、環境省共催)の受賞団体が発表され、県内からは石川町の住民自治組織「中田区」(塩田寿男区長)が選ばれた。ブナが自生する里山の荒廃防止や、江戸時代中期から地区に伝わる民俗芸能の舞い「中田のささら」の伝承などの取り組みが評価された。今年三月まで一年間区長を務め、中心的に活動に取り組んできた瀬谷茂信さん(62)らに、受賞の喜びを聞いた。



「二本ぶな」の名で親しまれる里山に立つ瀬谷さん(左端)ら

里山の荒廃防止へ地道な植林で保全

中田区は、同町中心部から東へ約五時。約八百人が住む。里山の保全活動は、一九九九年に設立され、三十一・七十代の住民三十六人で組織する「中田郷活性化委員会」が中心となって取り組んできた。瀬谷さんは「地道に活動してきたことを認めてもらい、うれしい限り」と声を弾ませる。

地区の住民から「二本ぶな」と呼ばれ、親しまれている約三畝の里山がある。標高616呎の頂上は視界が開け、遠く那須連峰や磐梯山を望む。

「昔は日常的に里山の資源を活用していたけど、今は意識して手を入れないと荒れ放題」と瀬谷さん。中田区では、この山の枯れ木を伐採し、ブナやスギを植えるなどして保全を図ってきた。また、県立石川高の生徒も昨年九月、体験活動の授業で、斜面に階段を整備する作業などに汗を流した。

里山以外の、地区内の貴重な巨樹二十本も「中田郷巨樹」として管理している。

また、担い手の減少が課題となっている民俗芸能「中田のささら」をビデオ撮影し、音楽も譜面化するなど、後世への継承に腐心している。

「特別なことではなく、昔からの活動を評価し直し、光を当てているのが私たちの活動」と瀬谷さん。かつて中田区は「市街地から遠く、耕地も狭くて住みづらい」とみられることもあったが、最近では「よい所だね」と言われることが増えたという。

「地域の住民に中田に住む誇りを何とか感じてもらいたい」と始まった保全活動は、ゆっくりとだが、着実に実を結びつつある。